

海へ、そして見知らぬ同行者たち（2）

藤 井 忠

オモニア広場から脇道に入ると、飲み屋の店先に男が三人、テーブルを囲んで腰掛けていた。地中海沿岸の黒髪と黒い目。何よりも黒い眉に、額はせまく角張り、三人とも口髭をたくわえ、椅子に寄り掛かり、あるいはテーブルに肘をついていた。店のなかの明かりが、テーブルとその周囲を彼らの影で暗くしていた。ソクラテスの名をもつ路地にホテルはあった。

フロントの男とは、たがいにへたな英語ですませた。痩せて背高く、よれよれのワイシャツを無造作にズボンにしまいこんだ中年の彼は、これからテレビで大統領の演説が始まるのだと、誇らかにいった。その6年前、クーデタにより軍事政権を確立したパパドプロスが、この年の6月1日に正式に王制を廃止し、共和制を宣言し、みずから大統領になったばかりだった。テレビの画面に最初はちょっと横縞ができ、やがて、ひとりの人物が映った。プレジデントだ、と男はいった。大統領の演説の声を背に、私はかってに、自分の部屋へと上がっていった。

私の部屋のある階は非政治的地帯で、妙にひっそりしていた。はすむかいの奥まった部屋はドアが開いたままだった。薄暗いところに三十半ばの女が坐っていた。メイドの控え室らしい。窪んだ眼窩から鳥のような眼がこちらの様子を窺っていた。暑いから、ドアを半分開けたままで着替え、荷物を整理したが、そのあいだもじっとこちらを見ているような感じだった。それから一週間、いつドアを開けても、薄暗い奥に女が坐っていた。いつも同じ女だったと思う。黒っぽい服を着ていて、たしか黒い布で顔を覆っているわけではなかったと思うのだが、黒い布で顔を隠してこちらを見ているような印象を与えていた。ある夜、僅かに顔を傾けるようにして笑みを浮かべたように見えた。

8月のアテネはうだるように暑い。翌朝、日本から

持ってきた薄っぺらなゴムぞりを履き、洗い晒しの登山帽をかぶって宿を出た。オモニア広場からアテナス通りを歩いて、まず、アクロポリスへとむかう。アゴラ（市場）は平日だが朝から人がうろうろ歩いていた。濃い眉に口髭の、色の浅黒い、南国的陰鬱さをたたえた男たちのあいだを縫って歩くが、日差しの強さに目が眩み、途中、深い麦藁帽子を買ってかぶった。だが、それでも脳天から熱が伝わってきた。埃にまじって、地面の熱が足を包み、全身がこの都市の暑さを吸収していく。

麓の露天街をへて丘をのぼった。角がすりへった平たい石も焼けていた。それを飛び石のように飛び渡ったり、神殿のドリス式円柱の立ち並ぶところに立ったとき、朦朧たる気分だったが、この気分はしかし快適でもあった。ついに来たという気持ちがあったからでもある。と同時に、眼はすでに、都市全体から湯気がたちこめる様にとらわれていた。その盆地状の平地を遠く囲む山々もまた揺らめいて見える。ああ、これはここに来なければわからぬことだったと感じながら、アテネ全体を包むこの暑さをいま全身で受け入れるつもりになった。

市街地のまんなかに、ニコライ堂の丸屋根のような白灰色の巨大な岩山が中腹まで緑鮮やかな松林に縁取られてのっそりおさまっていた。地図により、リカベトスの丘、295メートルと確かめる。しかも緑の麓の途中まで、周囲から、市街の石の建物が這い上がってきており、それら建物が陽をうけて煌めく波のようであり、波に囲まれたリカベトスの丘は壮大な蜃気楼のようにも見えた。

すべてが光と暑熱のなかに浸されていた。広大な風景に圧倒されたその目で自分が立つアクロポリスの丘の石の柱などを見るものだから、観光客が、案内人の説明に頷きつつ驚嘆している対象、というよりそのよ

うな説明には関心はむかず、ただ、堅固な石にふりそそぐ光を感じるだけである。神殿のカリアテッドにしても、それら神殿を支える女性柱の姿を仔細に見ているながら、一方では漠然と、石が陽光をふくんで放つその白さに惹かれていた。

アクロポリス博物館でも、厚い石壁の上方にある窓から外の光がさしこみ、室内にあって、立像やレリーフの大理石が独特に柔らかく感じられる。その印象のみをいだいてアクロポリスを降りた。

タベルナのテーブルに腰掛けて、ドルマダキア(肉と米をぶどうの葉につめたもの)を食べ、喉の渴きを葡萄酒で癒そうとしたものだから、体内をめぐる熱い液体と昼すぎの太陽の両方に攻めたてられ蹠蹠として埃っぽい人込みを歩きまわることになった。

翌日、デルフィ行きのバスに乗った。昨日の麦藁帽子にゴムぞうり、そして新たに買った、船の模様を縫い込んだギリシアの袋を肩からぶらさげていた。以後、デロスへ行くまで、ほとんどこの格好ですませた。

途中、このあたりがあたりの付近かと思うところ、赤い土の舞う道路で、驢馬に乗った老人とすれちがった。

不毛の赤土と驢馬の老人。ヘロドトスは、その叙述のなかである人物をとおして、ギリシアにとっては昔から貧しさは生来の伴侶だと記している。しかしながらギリシアは、叡知と、きびしい法の力によって、勇氣の徳を身につけたのであると。

まさに叡知の人オイディプスも、若き日にこの赤土の荒野を旅したのであろう。おのれを知るべくアポロンの神殿へむかうときに、あるいはあの不吉な神託を受け、より大きな不安をいだいて戻ってくるときに、あくまでも知ることを欲し知ることにより自己を破滅へと導いたあの主人公に惹かれ、予言を下したアポロンの神殿にむかうためにバスに乗った。だがいま、驢馬の老人が思い起させるのは別の男である。

ソフォクレスの劇では脇役であり、神話ではろくに言及もされぬ男である。わが子が父を殺し母と交わるという神託を受けたライオス王は、生れたばかりの子のくるぶしを針金で刺し貫いて、羊飼いである彼にキタイロンの山に捨て去ることを命じた。男はしかし赤子を殺すに忍びなく、コリントスから来た羊飼いに子をゆだねる。男のこの行為が、あるいは、非行為が、オイディプスをして彼に定められた運命の道を歩ませ

たのである。

舞台では、知らずして予言どおりの罪を犯した主人公が、民を救わんがために真実究明を叫び、そして盲目の預言者が意味不明の言葉で恐ろしい真相を暗示し、その周囲ではコロスが、神の業と人の迷いを歌う。歌が舞台にどよめくなか、主人公の心に不安がきざす。時に、見かけの安堵を得、しかしまた新たな事実によりそれだけいっそうその不安を大きくしつつ、にもかかわらず、あるいはさらに何ものかにかかれて、知ることを求め、前王殺害の真相究明から、ついには自己が何者であるかを知ろうとする。[注6-1]

認識のこの循環の一方で、あの脇役は事にかかわり、彼なりの範囲で事を知ったがゆえに、身を隠していた。

劇の筋からして、彼は、ライオス王殺害に際して生き残った唯一の目撃者である、とみなしてよからう。彼のみが逃げ帰った。が、なぜか、盗賊どもに襲われた、と報告するのである。男は自分だけ逃走したその法弱をごまかすために、盗賊の群れに襲われたといったのだ、という解釈もある。だがあの男はおそらく、王を殺した若者が誰であるかをその瞬間直感したのではないだろうか。嬰兒のオイディプスしか知らぬにしても、父王の若い日の面影を見せているその若者の姿を男は見なかったであろうか。しかもあのくるぶしの傷。名なき脇役の男は、おそらくは、誰が王を殺したかを予感したがゆえに、数人の盗賊に襲われたと報告したのではないのか。劇には、そのような端役の心理まで記してはいない。彼は事の恐ろしさを知ったために、盗賊というありふれた形にしたのではないであろうか。もしかすると、また、事柄が自分に及ぶことのないようにという保身の術がそこに働いていたかもしれない。

ともかく、この、数人の盗賊に襲われたという話が、まずオイディプスに真相究明への意欲を燃え立たせもし、追究の途中で彼の心にある疑いが生じたときにも、なお一筋の光を心のうちに残しておくことになる。殺人の事情を確かめるべく羊飼いの男を舞台に呼ぶよう命じたのもオイディプスだが、その男の出現が真相を決定的に明らかにすることになる。

この身分卑しい男は、オイディプスが新たな王として王妃のかたわらに座するのを見たとき、自分をこの町より遠く離れた田舎にやってほしいと王妃に頼んだ。劇の終わり近くはじめて登場した男の台詞から、彼は、あの神託のことも知っていたことがわかる。彼はすべ

てを、そのつど、知ったということになる。

秘密を知って沈黙するだけの分別をもった、用心深い男は、まず最初の使命に際して、嬰兒を山地に放置はしなかったが、赤子のくるぶしを貫いていた針金を抜き取ることはしなかった。(針金を抜いたのはコリントスの羊飼いである。) 彼はいわば死刑執行者にはならなかったが、それ以上のことはしなかった。三叉路での出来事においても、仮にライオス王に打ちかかる青年が誰であるかを、行為の遂行直前察知していたとしても、青年を止めることをしたかどうか。彼は傍観者であり、執行を避けただけであった。

回避ということでは、ライオス王は、なぜ自分で確実に、生れた不吉な子を殺さなかったのか。彼もまた決定的なことを回避した。(それにしても嬰兒のくるぶしに針金を通すという酷いことを、なぜわが子に行なったのか。[注6-2; 6-3])

そしてまたオイディプスも、自分に下された予言の実現を避けるべく、コリントスへは戻らずにそのまま旅に出た。が、赤土を歩む彼の行く先は、結局、かのテーバイになっていくのであった。

起るべき災厄を避けようとして、彼は荒野を進んでいた。未来から逃れるべく、前へと歩いていた。神託を受けたときから、彼は、いわば未来を避けつつ現在を生きるのである。しかし未来を回避すべく現在の瞬間においてなしたことが、実は、彼が避けんとしていた未来へ、つまり予言の実現へと通じていたことを、後に、つまり過去の事柄として、完了せることとして、知るのである。あの赤土の道の途中で、三叉路で、はやくも、最初の予言は実現したのだった。

ライオス王殺害の犯人探しがあるときから自己の出生をめぐっての追究になっていき、いまや、彼は自己が誰であるか、あるいは誰であったか、自己が行なったことが何であったかを知る。過去が暗闇より蘇りきて、恐ろしい無言の威力をもって現在の彼に迫り、彼を捉える。しかし彼において、遠い過去の彼と現在のこの彼との二つは一体となるのだろうか。おそらくは、避けんとしていたはずの未来は過去として、現在の瞬間へ、稲妻のごとき強烈な衝撃をもって集中し一体となるであろう。しかしその次の瞬間、彼の心は、時空の闇をさ迷いはじめはしないであろうか。

すべてを知った彼は、みずから両眼を突き刺す。

(コロス) ああ何という恐ろしいことをなされたか。何とてかくもむごたらしくお眼の光を消されたか。い

ずれの神があなたを^{そそのか}唆したもうたのか?

(オイディプス) こうなったのはアポロンのため、親しき友らよ。それはアポロン——このわしのこんな苦しい受難の^{さだめ}運命をもたらししたのは、だが両の眼を突き刺したのは、ほかならぬみじめなわし自身。

生れたときに父によってくるぶしを針金で貫かれ、一旦は両足で立つことの不可能な状態にされた彼、そして、「同じものが四本足・二本足・三本足になる」というあのスフィンクスの謎を解き、謎を解くことにより母を妻とすることになった彼は、いま、その母であり妻であった女の留金を用いて自分の両眼を突き刺した。過去のすべては、アポロンの予言のせいであったが、彼自身の意志によりそのような行為を自分の身体に加えたのだった。

(オイディプス) おお、闇よ、わしを包む暗い雲よ、いとわしく名状しがたく不吉な風に運ばれて抗うすべなくやって来たお前——。

闇のなかで、彼は、自己の過去を再びひとつひとつたどる。おお、キタイロンよ、なぜこのわしをかくまった……おお、コリントスの町よ……おお、あの三筋の道……かくされた深い谷間……おお、婚礼よ、結婚の床よ……と。闇のなかで過去を探り求め、その過去のひとつひとつを呪いつつ、そのように呪いのなかで、彼は、遠い彼とひとつになろうとしていくように見えるのである。

彼は、彼自身の意志によりこの土地から追放され、荒野へとさまよい出る。闇のなかをよろめきつつ二本足で歩き、放浪の旅に出る。その彼を支えるのは、木の杖ではなく、生身の杖、彼とあの女性とのあいだに生れた娘の手、である。

バスの屋根の一部は光を遮断するために紫色のガラスになっていた。光は直接さし込むことはないのだが、そのガラスの部分でせきとめられ重く淀んで頭上から車内へと沈んでくるようであった。

「刺すごとき陽の力」と「汗を吹き出す暑熱」と、ヘシオドスが『仕事と日』において歌う言葉をいままた読みつつ、アテネの暑さ、内陸の夏の蒸し暑さを思いかえす。この暑さはまた冬の寒さの裏返しでもあった。北風の吹くとき、「大地も森も呻く」と書かれている。北風は「牛の皮をも吹き通す」と。ヘシオドスは、怠惰にして無頼の弟に正しい道を説き、勤労の必然と尊さを教えるかたちでこの文を書き出してはいる

のだが、きびしい環境のなかで人間の生きることの困難がそこににじみ出る。

黄金・銀・青銅の段階をへて人間が不幸へと進む過程を描いたあの五つの時代の説話にしてもそうである。英雄の時代をへて、いまは鉄の種族の代である。「昼も夜も労役と苦悩に苛まれ」、「父は子と、子は父と心が通わず、(……)友は友と折りあわず」、「善人を尊ぶ気風はすたれ、むしろ悪事働く者を重んずる。」「悲惨なる人間には誰かれとなく、<嫉み心>がとりついて……」と。これがいまの姿だと、前7-8世紀に書かれている。仕事にいそしまぬ者がどのような境遇に陥るかを語りいましめる言葉は、飢えた寄る辺なき者の悲惨をわれわれにある切実さをもって伝えずにはおかない。「^{うれい}憂悶の思いを胸に抱きつつ妻子とともに、隣人の間をまわって食を乞うが、相手にしてくれぬ」と。「後になって窮乏し、他人の屋敷をまわって物乞いしても、何も貰えぬ」ぞよ、と。

人間が生きる赤裸々な条件のいくばくかを、あの土地はあのとき私に示してくれたのだった。オイディプスの悲劇的な追究もまた、テーバイの民に降りかかっている災厄の源を知り、それを断つべく開始されたものであったが、ソフォクレスの劇の内容に、ペロポネソス戦争の勃発とその翌年のアテネにおける疫病の猖獗が反映している可能性もある。[注6-2-b]

バスは自己の運命を知るべく人々の訪れていた聖なる地域へと近づきつつあった。パルナッソスの山間に入り、山道を幾重にも曲がり登る。アポロンの神殿の廃墟、円形劇場、競技場は、急な山腹にある。背後は峨峨たる岩山にさえぎられ、溪谷のむこうも山がそびえ、突き抜けているのはただ空にむけての方向のみであった。

ここが神託の地となったのは、地面の裂目よりの噴気のためといわれており、かつてそこには大地ガイアの託宣所があったが、後にアポロンが占めた。巫女ピュティアと託宣を求める者とはカスタリアの泉にて身を清め、アポロンの神殿の祭壇に生きた動物、たいいてい山羊を捧げた。山羊が全身を震わすとき、それは神のいまここにおられること、託宣にふさわし日であることを表わすのだとされた。巫女ピュティアは地底より霊気を吸い、忘我のなかで言葉を発した。発せられる言葉は普通人には意味不明のものであり、それを司祭が書きとめ解明し、韻文または散文に整えて託宣を求める者に渡した。託宣はしばしばどのようにも解釈

できるものであったという。哲学者ヘラクレイトスはアポロンの神託について次のように書き記している。「デルフィの神託の主は、何もいわぬ、何もかくさぬ、彼は指し示すのである」と。[デルフィ博物館長である Basilios Chr. Petrakos 著：《Delphi》(Esperos Verlag, Athen 1971) を主に参考にした]

あの夏、その閉ざされた地を蟬の鳴声がみたしていた。いや、あれは蟋蟀だったかもしれないが、絶え間なく翅をすりあわせるこの姿の見えぬ、ほんのひとときの生を鬱々と謳歌する昆虫の声が私につきまといっていたのだった。

海のすぐそばまで来ていながらまだ海へ行かず、どんよりと曇った次の日、進路を逆にとり、ミケーネへとむかった。

物見の男が、松明の合図を待って夜々眼が苦痛を覚えるほどに彼方を見つめていた、あの丘の突端に立った。背後と左右は石だらけの山肌ゆったりと囲まれ、前方だけが広々と開けていた。曇天のもとでかえって平野の遠くまでが異様に明瞭な姿を見せていた。しかしこの空間に開放の気配はないように思われた。

ようやく、男が待っていた松明の合図が、彼方に見える。が、それは計画されていたある惨劇の開始であった。しかもそれは、醜い争いが復讐を、復讐が復讐を生む、断ちがたい円環のひとつの環にほかならないのだった。そのような地にいま私が立っていることを意識するからか、遠方のゆるやかな起伏にとむ土地を眺めながら、いわば巨大な書割りに囲まれ閉じこめられているのを感じるのだった。

あのとき、見張りの男は待っていた。待つことに疲れはて、眼が痛むの何のと文句をいっていた。長老のコロスも待っていた。「もう十年目になる」と。トロイヤでの長い長い戦いのその場から離れて、戦からはとり残されて、「寄る年齢に体も弱り、益体もなく(……)街道をよろほい歩く」と、長老らは自嘲ぎみに語りつつ、待つことの辛さを表わす。語ることは彼らの務めである。そうして彼らはまた、戦いの残酷を語る。軍神アレスが両替に必要とするのは、「人の身体」であると。しかも、人の身体がその神にとって価値をもつのは、「槍をふるう」ことのできるあいだけであると。故郷に送られてくるのは、「人の代わりの灰」のみ。「ちょっとした手頃なかめ」をみたして。このような言葉を綴りつつ、彼らはこの十年を待って

いたのだった..

しかし、途方もない忍耐をもって松明の合図を待ちつづけていた女がいた。彼女は待ちつつ策を練っていた。松明の信号のあったことを聞いたとき、彼女は、火の神へパイトスが、「イーダの山から火をあかあかと照らし送って、松明は松明へと、焰の飛脚をよこしてくる」、その壮大な地勢を、心に浮かび上がらせるのである。まず、レムノスにあるヘルメスの岩へ、その島からアトス岬のゼウスの峰が火を受け継いで、ひと息に、「海原のひろい背も押し渡ろうほど、いそいそとして、進んでゆく^{あかり}燈明の、高く燃え立つ火の勢い……」と。こうして順ぐりに送られた火は、アラクナイオインの高峰に達し、そこからこのアトレウスの館に届いた。「その輝きは、あのイーダの山の、狼煙火の^{すえ}裔と言ってもいい」ものである、と彼女はそれら狼煙の連関と意味とをしっかりと把握してコロスに述べる。が、コロスは半信半疑のうちにまだあった。それどころか、この女が練りに練った殺人を実行しているときにも、老いたるコロスは、そこで何が起きているかをはっきりとは知らないのである。しかし女は事のはじめから計画にそって行動していたのだった。

いま、戦から帰ってきた夫が照りつける日の下を、疲れた表情で丘を登ってくる。うしろに夫のものとなったトロヤの王女カサンドラがいる。おそらく、その光景のすべてを女は、つまり彼の妻クリュタイメストラは、冷たく見ていたであろう。

アガメムノンの、総大将としての帰還の型通りの挨拶が終わったとき、宮殿より出た彼女は、夫とはまったく異なる言葉を長々と語るのである。いまや彼女の、長い歳月を妻として送らねばならなかった、孤独な日々と夜々を訴える声が、炎天下にえんえんと響き渡る。その長い時間は、また、彼女の計画を考えつくすに役立ったはずである。彼女の発する台詞には、ひとり家にて待つ者の心細さがまなましく表わされている。が、しかし訴える言葉のその一語一語がまたあまりに説得的であり理にかなっていてもいる。すべては彼女の計画のうちにあるのか、それとも、戦のあいだひとり残った妻の真実の気持ちがおのずと混じり入るのか。しかし夫はうわの空で聞いているのだった。

やがて、夫は、躊躇しつつ、しかし結局は妻にいわれるままに深紅の絨毯を歩いて、宮殿に入る。宮殿の外ではカサンドラの不吉な叫びが起こる。アポロンより予言の力を受けながらアポロンに肘鉄をくらわした

ために、彼女の言葉は誰にも理解されぬものとされてしまっていた。アトレスの家をおおう呪いを語り、いま館で何が起きようとしているかを彼女は叫ぶが、コロスには叫びの意味がわからない。やがてカサンドラはみずから歩を進めて宮殿へと入り、門が閉ざされ、宮殿より男の苦悶の声が鈍く響く。

ところで、彼方を見続けていた物見の男は、劇が始まるまえにさっさと退場してしまっていた。この名なき男は去りぎわにいったものだ。「もしもこの館が声を出せたならば、すべてをしゃべってくれようさ」と。いま館のなかで起きていることは、たしかに、神に呪われた一家の悲劇という大きな連関性のなかのひとつであるが、しかし、無理な戦を始め、かくも長きに渡って幾多の犠牲者を生み人々を悲痛のうちににおいやり、そしてひとつの都を滅ぼしてきたその総大将は、勝利の将としての名だけ残して、このように犬のように打ち殺されてしまうのが天の理であると、この悲劇は語っているかのようでもある。

「もしもこの館が声を出せたならば、すべてをしゃべってくれようさ」と、あの無名の男はいったが、しかし廃墟は、つまり出来事を目撃した場所は、自分が見たものをいつまでも語り伝える力を保持しているものなのか。おそらくそれはまた、廃墟の聞こえぬ声に耳澄ます人間の問題であろう。

彼方から雷雨の気配が迫ってきた。獅子門をくぐり、円形墓地のかたわらをまた通って登ってきた道をくだり、雨を避けてバスに乗る。バスに乗る前に濡れた身体を形だけ拭ったとき、いままで感じたことのない鈍痛を覚えた。右脇腹がおかしい。なに、乗り物のなかでいつも右側の手摺りに身体をもたせていたからさ、と自分にいい聞かせた。

ホテルに戻って服を着替え、ピレウス港に行った。船の時間を調べるためだった。ダッシンの映画で有名になった港の、とあるレストランで食事をした。暑さのなかで果物を買って食べたりしていたので、食事らしい食事をひさしぶりにしたような気がする。地酒の、強烈なウヅもむろん飲む。ホテルに帰ると、フロントの男はテレビのまえで大統領の演説に聞き入っているところだった。

翌日はアテネ市内を散歩して過ごした。

たいていの人がそうだろう、ヨーロッパに来てまず入ったところが博物館であった。建物のなかでまず感

じたのは、匂いだった。古い建物のどこか黴臭いような匂いが、床に塗った油と混じってつきまとう。そしてはっと気づいたのだが、もっと悩ましい香がただよってきた。ビアホールなどでさまざまな人々と一緒に煙草とアルコールの匂いのなかにいるときは気づかなかったもの。通りすぎていった女性の匂いであった。日本と違う濃厚なそれであった。たがいに、しかつめらしい顔つきで、顔は壁の絵画にむけられたまますれ違う。香はわずかに間隔ができたときにすっとこちらにただよってくる。しかしアルプスを越えてからはそのような匂いをあまり感じなくなっていた。慣れもあるのか。アテネ国立考古学博物館でもそのような感覚の作用はなかった。太陽のためでもあろう。

ミケーネの間で、黄金の仮面を見た。アガメムノンの仮面ともいわれたところのあのマスクであるが、帰りに、その絵葉書を買った。明日、デロス島へ行くことにした。

デロスは、片麻岩と花崗岩からなる不毛の島である。膝ほどの高さの枯れ草が乏しく生え、草と草のあいだから、真夏の太陽を受けて脆そうな灰白色の岩石が白々と肌を現わしている。この荒涼たる風景を呈する島がアポロンとアルテミスの姉弟神の誕生の地となったのには次のような謂れがあるが、そこにもまた、放浪の物語がつきまとう。[注7]

ゼウスとのあいだにこの二人を身籠もったレトは、ゼウスの妻ヘラのために安住の地を奪われ、子を生む場所を失った。(ヘラが地上のいっさいの土地にレトが安心して子供の産める場所を提供することを禁じた。絶望したレトは諸国をさまよひ、すべての国から追い出されたが、最後に、デロス島が彼女を迎えた。というのは、もともこの島自体が海上の放浪者で、しかもすこぶる貧しい不毛の土地だったから誰から何をされる心配もなかったからである。)この島は、レトから固い誓いを得て、将来アポロンの由緒の地として尊ばれるのを誇りに、彼女を受け入れた。

レトは島でたった一本生えていた棕櫚の木の下で、子を産むことになる。しかし九日九夜、激しいお産の苦痛にさいなまれなければならなかった。彼女を看護する幾多の女神たちのなかに、安産の女神エイレイテュエアが姿を見せていないからである。というのもヘラの計略で、彼女はそのときオリンポスの頂で金色の雲に閉じこめられてやすらっていたからである。女神

たちのはからいで、虹の神イリスが立ち上がり、七色の虹の橋をのぼして見る見る天空をつらぬいてオリンポスへ行き、エイレイテュエアに言葉をかけ、その心を動かし、ヘラに気づかれぬようデロスへむかわせた。

大地の歓喜につつまれつつ、赤子は光の世界に躍り出、女神たちにより清らかな海の水を注がれた。(最初に生まれたアルテミスは生まれるとすぐ、母の出産の手助けをし、次に生まれるアポロンを無事この世に引き出したともいわれている。) [呉 茂一『ギリシア神話』をもとに記す。グリマル『ギリシア神話』の叙述をカッコのなかに補った]

直接デロス島へは行けない。ピレウス港より船でまずミコノス島へ向かう。甲板はギリシャの雰囲気にみちていて、民族音楽にあわせて若い女たちが手拍子を打っていた。

海に出てあらためて内陸の暑さが確認された。陸地をつつむ重い空気から解放され、長椅子に横たわり、娘たちが持ち込んだカセットデッキの音楽を聞きながらエーゲ海の光を存分に受けとめた。

丘の上に風車が立ち並び、漆喰を塗った白壁の家々がびっしりと立つ島ミコノスに降りて、観光案内所へ向かおうとすると、ひとりの若い男が近づいてきた。もっといいところがあるからついてくるよう英語でいう。ひどい英語だが、アテネの大学で哲学を専攻しているという。ミシェルという名であった。ミシェルと、白い漆喰を塗った、細い、迷路のように入り組む道を歩いた。気づくと、彼はギリシア語で話しており、私のほうもドイツ語を使っている、それでなんとか通じていた。

そここの白い家の屋根に、ギリシア正教の十字架がつつましく立っていて、ほんの一度のことだったが、白壁と白壁の間に、長い髯をはやした黒服の司祭の姿が見えたかと思うとすぐに消えた。

ミシェルが路地の角にある一軒の家の扉を叩くと、きしむ戸を開けて中年の女が出てきた。ミシェルは女と何か話し、彼のいうまま、私も500円相当の金を女に渡した。ミシエルのあとについてまた路地を歩き、宿に辿りついた。宿屋とは思えない、白い、ただの住居だった。部屋はミシェルと一緒に、寝台がもうひとつ、別の壁際にあった。ミシェルは自分のベッドに寝てぼんやりしていた。私はひとりで宿を出た。

あの迷路を再びどう歩いたのかいまでは思い出せないが、海辺に出て、海岸のレストランで風を受けながら夕暮の海を眺め、魚料理を食べ、それから、先程船が着いた場所へ出た。男たちが石の岸壁に腰掛け、足をぶらぶらさせ海を見ながらしゃべっていた。三輪車に乗った男の子がかたわらを通りすぎた。三輪車が家の角を曲がって見えなくなったあとも、ガラガラいう音だけはいつまでも聞こえた。

島の夕暮は長い。水平線の彼方に太陽が沈むまで黄金の輝きが島をおおっているのだった。やがて、夕日は海の面にやわらかな曇りをつけ金色に染めつつ、そうして光をしないで失い、灰色に、暗褐色に変わって消えていく。そして暗い海に周囲はすっかり取り巻かれる。暗い、黒い海以外に自分のまわりには何もなくなってしまふ……

ミシェルは眠っていた。夜中、二十歳ぐらいの若者が部屋に入ってきた。十分に酔っていて、第三のベッドにぶっ倒れ、たちまち鼾をかきだしたが、なんという種類の鼾か。内蔵が渦巻き細い管をとおって口からほとばしるような、鬱屈したもの切ない噴出の響きが強弱のうねりを伴い、狭い部屋に巡回した。ミシェルも目を覚まし、ごくあたりまえのこのように平然と、眠っている若者にギリシャ語で何かいった。鼾はふっと止まった。

翌朝、そっと身支度をすませ、現代ギリシア語会話(ドイツ語版)をもとに、いろいろ世話になったとメモに書き、日本の煙草を一箱そえて、ミシエルの枕元に置こうとすると、相手は目を覚まし、寝たまま手を差し出してきた。その手を握って、部屋を出た。そのとき若者も細く眼をあけて頷いた。

ポンポン船は8時に出ると前日いつていたが、10人ぐらいが乗ると、7時半過ぎにはもう港を出て、すぐに沖へと向かった。

五十歳ぐらいの親父が舵をとり、少年が下働きをしていた。ひどい揺れだった。私たちは、しばしば水しぶきを浴びた。内陸の蒸し暑さは拭いとられ、デルフィの謎にみちた不安もミケーネの鬱屈も消え失せ、浴びるしぶきは爽快であった。

かたわらを少年が通り掛かったので、私はエンジンの音に負けぬように大声で叫んだ。デーロス、アポロン、と。そのとき、小舟がちょっと回転して大きな波のうねりを生じ、私は海の飛沫を全身にあびた。顔の滴を拭くと、少年はまだそばにいる。すっきりと立

って彼方を指さしている。その指の先、揺れる船のむこうに、小さく島が見えた。

(1996.5.31)

〈注〉

- 1) ヘシオドス『仕事と日』(松平千秋訳・岩波文庫)
- 2) ヘロドトス『歴史』(松平千秋訳・「世界の名著」中央公論社)
- 3) ソポクレス『オイディプス王』(藤沢令夫訳・岩波文庫)
- 4) アISKYロス『アガメムノン』(呉 茂一訳・筑摩書房)
- 5) 呉 茂一『ギリシア神話』(新潮社)
 ピエール・グリマル『ギリシア神話』(高津春繁訳・文庫クセジュ)
 アポロドーロス『ギリシア神話』(高津春繁訳・岩波文庫)
 Walter Jens: Die Götter sind sterblich (1959, Neske)
- 6-1) しかし、オイディプスはあるときから知っていた、そしてイオカステもクレオンも知っていた、という解釈がある。ジョン・スタイナー「見て見ぬふりをする」(阿比野宏訳・imago, 1994, Vol. 5-9 特集:エディプスの神話, 青土社)参照。
- 6-2) 主人公のくるぶしの傷については、吉田敦彦著『オイディプスの謎』(1995, 青土社)参照。オイディプスがスフィンクスの謎を解いた鍵は「足」にあることに着目し、そこから独自の論を展開。荒涼とした地でスフィンクスと向かいあっているこの男こそ、一度は両足の踵をピンで貫かれ、二本足で立って歩く可能性を否定され、「四本足の獣たちの住処へ放逐された」男であった。二本足でありながら、「その両足の踵にはっきりと、二本足性の否定を含意するしるしづけを刻印されていた」と。「外見的には二本足の人間だが、内実すでに四本足の獣に成り下がっており、それ故じつは今すぐにも、三本足にならねばならぬはずであること」で、オイディプスはまさしくスフィンクスの謎そのとおりでもあった。しかも伝承では、このとき彼は杖をついていたともいわれる。また凶像表現においては、「それは人間だ」といって、彼は自分を指し示していたことを、著者は指摘する。
- 6-2-b) 上掲書、「9章、アテネの疫病との吻合」参照。
- 6-3) 佐藤紀子「コロノスのエディプス」(上掲の総合誌 imago, 1994, Vol. 5-9)には、「嬰兒の身体への虐待」として、この「腫れた足」オイディプスの傷が扱われており、上記の吉田氏の評論とはまた異なった形で身に迫るものを感じさせる。佐藤論文が身に迫るのは、「目印としての傷」ということで、来日する日中孤児の人々が自分のアイデンティティを求めて禿げとか傷というわずかな身

体的特徴を、テレビのカメラにむかって必死でかざす姿についての、筆者の叙述が挿入されているためでもある。

この文を読み、身体的特徴をもって自己が誰であるかを知る手がかりにする人々のことへと私の思いも集中した。身元不明の死体なら、傷跡のような特徴によってしか、自分が誰であるかを探り出す手がかりを与えぬであろう。が、しかしあの孤児と呼ばれる人たちは生きているのである。

いま、かたわらには、新正 卓氏の写真集『私は誰ですか』がある。このおそろしく分厚い本には、1981年より90年までに来日した、身元不明の1092人の中国残留日本人孤児の肖像が、B4版に直立の姿勢で大写しになっている。身体的特徴を書いている人もいる。私は誰なのか、と問うてはいるが、むろん記憶喪失者ではない。おぼろげな、幼い日の記憶を記している人もいる。朦朧としているが意識にまでのぼってこぬ過去の何かをいただき、自分が日本人であることを示して、自分が日本人の誰であるかを知るべく、あるいは、自分が誰であるかの情報を得るべく、つまり、おのれを知ることについては、あまりに不確定な状況のもとで、カメラの前に立った人々である。日本人であることを隠され、またそれがわかってからも、自分で隠さざるをえぬ状況に生き、それぞれの境遇において、孤独に、自己の過去の意識を取り戻そうとしつつ生きてきていた人々である。上海や

大連などでは近代化が進み、その模様をテレビで見たりするが、白黒独特の、ざらざらした現実の感触をたたえるその写真に写されている人々の、真剣な、どこか戸惑いを含んだ、日本人であり中国人である顔に、少年時代の私の見た何かを呼び起こすものを感じもする。彼らには、古代の悲劇の主人公オイディプスのように真実へむけてひとつずつ剥ぎ取っていく手がかりはない。たとえ悲劇的にせよ、閉じられていく円環の見えぬ軌道はない。一定の時間内に恥じらいをもって必死に述べる言葉は、たいては虚空に消えたのであろう。私はまだ大連に行っていないので、かの大陸のことはその一部ですらこの眼で見えていないのであるが、写真に撮られた日から彼らのあいだに流れた時間についても思いをむけざるをえないのである。問いはしかし、おそらく変化してゆく日常において、彼らの内部でくりかえされていくのであろうと、思うのである。

- 7) カール・ケレーニイ/C. G. ユング著『神話学入門』(杉浦忠夫訳・晶文社)参照。(a) レトとアポロン、つまり母と子とが、荒涼たる孤島デロスに遺棄されたことについては、「孤児」の章。(b) デロス島がもともと海に漂う島であったということ、そしてアポロンと海との関係、「海と童児との結合という古典的ギリシア的な形象」については、「アポロン」の章。

[ふじい ただし 横浜国立大学経営学部教授]